

## ■ 『八色西瓜』のあゆみ

“八色”とは、「春から秋にかけて八色（やいろ）の草花<こぶし・桜・つつじ・藤・チューリップ・椿・ひまわり・コスモス>が咲き乱れる原＝八色原（やいろはら）」という意味で、そこから収穫される西瓜を『八色西瓜』と命名されました。

この『八色西瓜』の歴史は古く、大正末期から昭和初期に大和町（現南魚沼市）の三用地区を中心に栽培が始まりました。当時の種苗は、自家採種で品質改良は行わず（現在は、一代交配の購入種子を使用）、作付面積も一戸当り1～10アール程度でした。収穫された西瓜は小規模ながらも『八色西瓜』の名で販売され、出荷組合設立後は作付面積の拡大を図り、魚沼・長岡・新潟方面に出荷地域を拡大しました。

第二次世界大戦中は穀物不足により一時西瓜栽培を中止していましたが、昭和23年に栽培が再開されました。複数の生産組合が発足しましたが、昭和56年の西瓜選果機の導入を契機に、『八色西瓜生産組合』が発足し、西瓜生産者＝八色西瓜生産組合＝JA魚沼みなみが一体となり、高品質な西瓜生産に取り組んでいます。

当地域では「夏といえば八色西瓜。八色西瓜といえば夏が来る」といわれ、夏の風物としてなくてはならないものとなっています。



## ■ 八色西瓜生産組合

●組合長：上村 育弘

●構成員：108名

当組合では、“味にこだわった西瓜の生産”をめざし、1つの株から収穫される玉数を適正な数（概ね3～4果）まで制限し、収量よりも品質を重視しています。

西瓜生産は天候の支配を受けやすく、生産者にとっては安定生産が大変難しい作物の代表と言われています。しかし、現在私たちは、天候に左右されず、高品質な『八色西瓜』を生産できるよう日夜努力をしています。

当地は、土壌が西瓜生産に適している黒色火山灰土、また八海山をはじめとする越後三山を眼前に、周囲を山々に囲まれた盆地地帯で、昼夜の温度格差が激しいという地理的条件に恵まれています。そのため、糖度が高く、シャリ感のある西瓜が生産できるので、また西瓜は外観による内部品質（おいしい西瓜）の判断が難しく、「あたり・はずれがある」と言われますが、「八色西瓜にははずれがない」と、市場から高い評価を受けています。出荷時の検査でも、独自の検査基準を設けています。従来は経験豊富な生産者が検査員として



集荷場に集まり、西瓜を一つ一つ手でたたきながら、その音や響き具合、手の感触で品質を判断し格付けを行ってきました。

平成 15 年に最新鋭の自動選果機を導入し、全てセンサーによる検査となりました。現在、外観・空洞・熟度・うるみ・糖度をセンサーが測定し、格付けを実施しています。従前からの経験を踏まえ、この検査基準も私たち生産部会で独自に設けた基準値で実施しています。私たち八色西瓜生産組合では、生産者とJAが一体となり、「安全・安心」でおいしい八色西瓜の生産に取り組み、消費者の皆さまにお届けしています。

## ■ 八色西瓜生産組合の歩み

昭和 56 年	旧新潟大和町農協が農産物流通センターを建設。西瓜選果機を導入。 旧大和町内に 4 組織あった西瓜出荷組合が合併し「八色西瓜生産組合」を設立。共選体制が始まる。
昭和 60 年頃	開閉（つる引き）栽培導入
昭和 63 年	選果機増設。荷受コンベアの増設。選果機の配置変更。
平成 10 年	開閉栽培品種に『貴ひかり』を導入。
平成 12 年	JA魚沼みなみの誕生（JA新潟大和町・JA六日町）に伴ない、六日町園芸組合西瓜部会と合併し、作付面積 80 ヘクタール規模となる。
平成 13 年	西瓜自動選果機導入に向け着手。 小玉すいか（八色っ娘）試験販売開始
平成 14 年	農業生産総合対策事業（国）・園芸産地育成強化事業（県）を受け、新しい西瓜自動選果機の建設開始。 小玉すいか品種を『ひとりじめ』に統一。 降雹被害による出荷量激減。
平成 15 年	小出町すいか生産組合と合併。 新西瓜自動選果機稼働開始。 園芸トレーサビリティシステムモデル産地として栽培履歴をホームページで開示。 開閉栽培品種を『貴ひかり』から『祭りばやし 777』に変更。 小玉すいか品種を『ひとりじめ 7』に変更。
平成 16 年	後継者育成を目的とした、若手研究部会の立ち上げ。
平成 17 年	つる引き栽培方法 「祭りばやし 777」に統一。
平成 18 年	小玉西瓜名称「八色っ娘」商標登録
平成 19 年	八色西瓜生産組合（132 名）エコファーマー取得
平成 25 年	強い農業作り交付金事業により西瓜選果場の若返り工事を実施